

誰が何故彼を殺したか

平林初之輔

青空文庫

一

下田の細君が台所の戸を開けたときは、まだ夜があけてまもない時刻だった。

その朝は、東京に気象台はじまって以来の寒さだったことが、その日の夕刊で、藤原博士の談として報じられた程で、まるで雪のようなひどい霜だった。地べたは硝子をはりつめたように凍いてついていた。

彼女は左手にばけつをさげ、右手に湯気のもやもやたちのぼる薬缶やかんをさげて井戸端へいった。井戸というのは、下田の家と、林うち

の家と、柴田の家と三軒でかこまれた三四十坪^{ばか}許りの空地の隅にあつて、この三軒の者が共同に使用している吸^{すい}揚^{あげ}ポンプの装置をした井戸であつた。

彼女は、薬缶の口から、ポンプの活^{かつ}栓^{せん}のところへ熱湯を注ぎこんで、ポンプの梃^て子^こを押しはじめた。この数日来そうしないと、活栓がすっかり円筒の中で氷りついていて、びくとも動かぬのだつた。

うすく水蒸気の立ちのぼる水を容れたばけつをさげて台所口へ帰ろうとした彼女は、ふと、柴田の家の門の前に、黒いものが、うず高くかたまつて氷りついているのを発見した。一瞬間彼女は、その異様な物体を不思議そうに凝視していたが、やがて、ばたり

とばけつを手から落とすと同時に、何とも名^{めいじよう}状しがたい、一種の鳥の啼^{なきごえ}声のような叫び声を出して、その場に尻餅^{しりもち}をついて倒れてしまった。

「どうしたんだ」と言いながら、真っ先にねまきの上へどてらを着込んで台所口からとび出してきたのは、主人の下田だった。それとほとんど同時位に、二階に間借りをしている法学士の安田という男も、二階の雨戸をあけて、下の様子を見て「どうしたんです？」と慄^{ふる}え声で叫びながら、あわててとび降りてきた。

だが、下田の細君は、ひどくびっくりして、二十秒間ほど口がきけなかったただけのことで、別に気を失っているのでも腰をぬかしているのでもなかった。

「し柴田さんが……」^た起ち上がりながら彼女は、柴田の家の^{うち}門前にへたばっている黒い物体を指さして言った。

下田は指さされた方を見ながら思わず二三步前へ進んでいった。ちようどその時に安田も下りてきて、あわただしく、そちらへ進んでいったのだった。

それは、氷りついた人間の死体であつた。口から垂れている水液は、そのまま氷つて、氷柱^{つらら}になつて地べたにつながっていた。^がい^{とう}そう^{そで}す^そ

外套の袖や裾はもとより、頭髮も地べたに接している部分はかたく氷りついていた。帽子は一間ばかりはなれたところに踏みにじられたままやはり地べたに氷りついており、帽子の上にも外套の上にも一面に霜がおりていた。「あなたはすぐ警官をよんでき

て下さい」と下田に言われて、安田はがたがたふるえながら、だまつてかけ出した。

「お前は林さんを起こしておいで」と細君に命令しておいて、下田は上をむいて「柴田さーん」と大声で叫んだ。柴田の家のなかうちからは返事がなかった。彼は、門の戸をあけようとしたが、内側から用心棒がしてあると見えて、どうしても開かぬのでどんどん戸を叩きながら、「柴田さん、大変です」と叫びつづけた。

一分もたつてから、やつと、「どなたです？」という女の声が二階から聞こえた。

「大変ですよ。ご主人が」と彼はほとんど腹だたしそうに叫んだ。やつとのこと、ばたんばたんはしごと階子段を下りるあしおと蹠音がきこ

え、玄関のかきがねを外す音が聞こえて、やがて門の戸の用心棒をはずして、柴田の細君が出てきた。

彼女は、夫の死体を見ると、さすがに感動したものと見えて、「まあ」と一言言ったきり、棒だちになってふるえていた。が、氣をとり乱すほどひどい衝撃を受けた様子はなく、どちらかと言うと、夫の死体をはじめて見た細君の態度としては冷静すぎると思われるくらいだった。

一方では下田の細君が、どんどん木戸を叩いて呼んでいるのに、林の家ではうんともすんとも返事がなかった。が、ものの五分もたつてから、四つになったばかりの長男が眼をさまして泣き出した。それにつづいて、やっと林夫妻も眼をさましたらしかった。

そのうちに、物音をきいてかけつけてきた近所のものや、通りがかりの用ぎきの小僧などがいつのまにか集まって、死体のまわりに環^わができてしまった。そこへ安田に案内されて××派出所の巡査もかけつけてきた。この大騒ぎの最中に、林夫婦はねむような顔をして、その場へ出てきたのであった。

二

下田が気をきかして非常に事務的にたち働いたために、げんじよ現場は少しも乱されず、死体は発見されたときのままに保存されていた。巡査が現場へ到着してからは、下田は巡査と協力して、

世にも珍しい氷った死人を見たさに、そばへ近づいてくる群集を制止して、本署からの警官の臨^{りんけん}検をまっていた。

その間じゆう、林は時々退屈そうに大きな欠^{あく}伸^{くび}をしたり、何か言いたそうにあたりの人の顔をじろじろ見まわしたりしていたが、とうとう、誰にともなく「因果応報ですな」と吐き出すように言った。林の細君は、四つになる子供を抱えてそばにたっていたが、夫がだしぬけに人前でそんなことを言ったので、「貴^{あなた}方！」と言いながら、片手で夫の袖をひいた。

被害者柴田の細君の様子は実に妙だった。彼女は非常にそわそわしていたが、それは夫が殺されたのを悲しむためというよりも、何か別の理由によるらしかった。なぜというと、彼女は夫の死体

の方は最初にちよつと一いちべつ瞥をくれただけで、それ以後はてんで見向きもしないで、ただもう一刻もはやくこの場を逃げだしたいというようななそぶりをしていたばかりか、実際、一度くるりとうしろを向いて家の中へはいりかけたのであった。むろん警官に注意されて、渋々あともどりしてその場に立っていたが、それから、彼女の様子は余計にそわそわしているように見えた。

下田は、こうした他人の面倒を見ることが心からすきらしく、しじゅう、何かと、世話を焼いていた。その様子は隣人の不幸をいたむというよりも、むしろ、多おおぜい勢の人の中で、立ち働く機会が降つて湧いたのを喜んでいるという風だった。細君の方は、それとは正反対に、しじゅうふるえながら、ろくろく口もきけな

った。二人の子供——男の児は七つで女の児は五つだった——も起きてきて母親の両側にたつて、その場に集まった人々をおとなしく見物していたが、母親が気を配つて、死体は見せないようにしていた。法学士の安田は、はじめからしまいまで一語も言わずに、下田の子供らのうしろにたつて、じつと不思議な死体を視つめていた。

一般に、こうゆう場合に、群集の間にかもされる同情、しゆうた 愁嘆の雰囲気は、この時にはまるで無かつたと言つてよい。それ

どころか、群集——特に近所の人たち——の世論は、どうやら、「因果応報」だと言つた林の言葉を裏づけてゆくらしい傾向があった。「悪いことはできません」とか、「うらんでいる人は随

分ありましようからね」とか、柴田の横死を悼むよりも、むしろ痛快がつているらしい私語が、はじめはひそひそとであつたが、しまいにはほとんど公然と、未亡人の眼の前で、囁きはじめられた。

それだけならよいが、とつぜん妙なことが起こつてきた。今までだまつていた安田が、急に「諸君」と叫んだ。一同はだんだんお祭り騒ぎのような気分になつて、青年の方を見た。

「柴田は生きている方が我々人類のためになつたでしょうか、それとも死んだ方が……」

その時にちょうど、警官の一行が到着したので、群集は「しつ」と叫びながら、新来者の方へ注意を向けた。安田の演説は自然に

消滅した形だった。

三

死体の付近には血のあとは少しもなく、死体そのものにも、ちよつと見たところ外傷はなかったので、自然死ではないかと思われたが、医師の検案^{けんあん}の結果、頭部の打撲による内出血のために死んだものであることがわかった。しかも、明らかに凶器として使用されたいし棒杭^{ぼうくい}が、死体から一間ばかりはなれたところに投げすてられて、霜をかぶっていた。その棒杭は林の庭の垣からひきぬいたものであることもすぐにわかった。死体はまるで氷

詰めにされたようなもので、まだ生々^{なまなま}としてはいたが、氷や霜
だけから見ても、少なくとも、夜半^{よなか}の十二時までには落命していた
ものであることが素人^{しろうと}にでもわかったし、医師の意見もそうだ
った。

そのうちに、地方裁判所の一行も現^{げんじょう}場へ到着した。八時半
頃になって、署長と検事とが立^{たちあい}会で証拠人の仮審問がはじまっ
た。

下田の細君、下田、安田という順序で、死体発見のときの様子
が、だいたい私が前に述べたような順序で、主として下田の口か
ら答えられ、他の二人は、それを確認した。

それがすむと、被害者の身元調べになった。ところが、未亡人

は、被害者すなわち自分の夫の年齢も、原籍も、職業すらも答えることができなかった。このことは、ひどく係の役人を吃驚びつくりさせた。「自分の現在の夫の年齢も職業も知らんということがあるか」と署長はどなった程だったが、「いくらきいても教えてくれませんでした」と未亡人はおだやかに答えた。その様子を見ると、未亡人の答えが嘘でないことは誰にでもわかるくらいだった。

検事が、未亡人と被害者との関係を審問しはじめた時、居並ぶ人々は一斉に非常な注意をその方に集しゅうちゆう注しゅうちゆうした。というのはこの二人の関係は近所界かいわい限で好奇の的になっていたからである。被害者は既に五十にまもない年齢好であるのに、未亡人の方はまだ、二十二三の若い身空であつたせいもあるが、何よりも人々の

好奇心を惹いたのは、被害者が、この家に住むようになってから二年たらずの間に五度も細君をかえたという事実を知っていたからだった。

未亡人は、最初のうちは、顔を赧らめて答えなかったが、検事の訊問しんもんにのつぴきならぬ氣勢が見えたので、やっと口を開いて「妾わたくしはだまされたのでございます」と比較的大きな声で言った。

この時にはじめて彼女の双眼には涙が浮かんだったのであった。彼女が検事の訊問に答えたところを総合すると、彼女は、二年ばかり前に一度日本橋の商家の若旦那だんなと結婚したのであるが、口やかましい姑しゅうとめと、それに対して全く彼女をかばってくれない夫とに愛想をつかして、わずか半年たらずで夫の家を飛び出して実家へも帰

らずに、ある旅館の女中頭がしらのようなことをしていたのであるが、二ヶ月ばかり前に、新聞の広告を見て柴田のところへ来たということであつた。その広告の文面を、彼女は一字一句今だにおぼえていた。

妻求

二十五歳迄の婦人を求む、仕度不要再婚妨げず。当方三十四歳、法学士月収三百円係累なし、本人来談。姓名在社

彼女は、この広告を見たとき、どういふものか妙に気がふらふらしてきた。最初の結婚が不幸であつただけそれだけ、世の中のどこかに、まだ幸福が残つていそうな気がするのであつた。ことに、新聞にまで広告して配偶者を求めている男のことだからきつと不幸な人であり、したがつて情愛にも富んでいるだろうと想像すると、つい妙な気もちになつて、新聞社へ所をききあわせて、今の柴田の家へたずねてきたのであつた。

彼女は柴田にあうまでは、新聞に広告を出さねばならぬくらいだから定めし、相手は醜^{ぶおとこ}男であろうと想像していたのであつた

が、その実柴田は俳優にでもありそうなタイプのやさしい顔のもち主であつたので、まず第一に驚いたのであつた。しかしそれと同時に三十四歳とはどうしても見えない、少なくとも四十はだいぶ越しているらしい年配である事を発見して二度吃驚した。びっくりしかし何よりも彼女を驚かしたことは、柴田の家には、既に細君らしい女がいたことであつた。それから、彼女はその翌日婚姻証書に捺印した^{なっ}こと、以前の女はその夜^よいつのまにか姿をかくしてしまつたこと、一ヶ月もたつと、彼女に対して非常な虐待がはじまつてきたこと、最近また新聞広告を出して彼女の代わりの女を探していたらしいこと、前日もそれらしい女が来たこと、婚姻証書などは決して役所へ届けていないらしいこと、したがって、どん

なひどいめにあつても、ただ泣き寝入りで出てゆくより仕方がないこと、特にこの頃は、虐待がひどく、この寒いのに布団ふとんも火鉢もかしてくれなかったことなどを、次から次へと涙ながらに話した。そして最後に、「妾わたしはどうしても復讐ふくしゅうせずにおかぬといさつきまで決心していました」と真実をおもてにあらわして検事につげた。

四

検事が未亡人に向かつて、被害者の職業をきいているとき、林が横あいから口を出して、「こいつは詐欺さぎと賭博とばくで食って居たん

だ」と言つたので、未亡人の訊問がすむと、検事は林の方を向いてその点についての訊問をはじめた。林は、色々例をあげて説明した。柴田が毎晩のように二階で賭博を開いていたこと、しよつちゆう誰かが不正なことをすると見えて喧嘩がはじまつたこと、自分の家でやらない晩はどこか仲間の家でやっているらしいこと、それから、新聞広告で色々な女を釣り込んで、身のまわりのものをすっかりまきあげて裸にして返してしまつたこと、詐欺はなかなか大仕掛けで、最近にも青森から、貨車二両分の林檎りんごをとり寄せるというので、前渡金まえわたしきんを着服してすつたもんだと騒いでいたこと、かりんのちやぶ台を五百台引き請けて、同じように前渡金を着服したこと、月末には、いつもどつかへ姿をくらまして、家

賃や酒代はもとより、牛乳屋や新聞屋の払いまで一度もしたことがないことなどを、まるで、当人を前において面罵めんばするような激げききこう

昂きこうした口調でしゃべり、最後に、「実際私でも、あんな奴はぶち殺してやりたいほど癪しゃくにさわっていました」と付け足した。

林の証言は、近所の人によつてすっかり確認されたのであつた。つづいて凶行当日の訊問に移つた。一番先に訊問されたのはやはり未亡人だつた。

「被害者は昨夜家ゆうべうちにいたか？」

「はい、九時半頃まで家にいましたが、九時半頃に、用があるからと言つて出てゆきました。出がけに、今夜は帰らぬと申していました」

「この通りの服装で出かけたのか？」

「左様でございます」

「それつきり帰ってこなかったのじやな？」

「はい」

「戸締まりはすぐにしたのか？」

「はい、あの人が出てゆくとすぐに戸締まりをして私は二階へあがってやすみました」

「それから何か物音をきかなかったか？」

「すこしもききませんでした。十一時頃まで眼をさましていたのですけれど」

「昨夜は誰か来客はなかったか？」

（ゆうべ）

この問いに対して彼女は、しばらく答えるのを躊躇ちゆうちよして、
たが、やがて、

「いいえ、どなたも……」

と少し顔を赧あからめながら答えた。

「きつと左様か、誰か来たのではないか？」

と検事は彼女の顔色を見て、すかさず追及した。彼女が哀願する
ように眼をあげてちらつと四辺あたりを見まわした時、林が横から口
を出した。

「私が昨夜まいりました」

「いま林が昨晚お前の家へ行つたと言っているがほんとうか？」

と検事は再び未亡人の方へ向きなおってたずねた。未亡人は低

い声で「はい」と肯定した。

「何のために林は被害者の家をたずねたのか？」

彼女はまた返事に窮してだまってしまった。すると、林が再び
横よこあい合から、

「それは私から申し上げましょう」

と言ったので、検事は、こん度は林の方へ向き直って、訊問を
つづけた。

「被害者と、この奥さんとの間に、昨晚ひどい喧嘩がありました。
私の家へはそれが手にとるように聞こえるのです。何でもひどく
打ったり蹴ったりしているらしく、奥さんは泣いておられました。
明日別の女がはいってくるので、この奥さんを追い出そうとして

いる様子でした。私は、これまでもあったことなので、あの大泥棒の色魔の餌食えじきになつておられる、この奥さんがかわいそうで、じつとして聞いておれなくなつたものですから、ちよつと口をきこうと思つて出かけて行つたのです」

「それからどうしました」

「実にあきれた奴です。この奥さんを指さして、こいつは女中にやとつたので、もう不用になつたから出て行けといつてゐるのだと空そらうそぶ嘯ささやいてゐるのです。奥さんが婚姻証書のことを言い出すと、そんなものにはおぼえがないと言つてゐるのです。きつと、すぐに焼き捨てたに相違ありません。必要な間は、婚姻証書を楯たてにとつて女を手放さないで置いて、用がなくなるとそんなものには

おぼえがないと言ってるのです。これまでだって同じで多勢おおぜいの女をいじめたに相違ないのです。でも、私がその場にがんばっているのです、とうとう奴は捨台辞すてぜりふをのこして出てゆきました。

それから、私もちよつと玄関口で奥さんを慰めておいて帰ってきました。あんな奴は、殺された方が社会のためですよ」

「それからあと、何も物音はきかなんだのですか？」

「それからすぐねてしましまして、あとのことは知りません」

その次に下田と下田の細君とがつづいて、前夜のことを訊問されたが、二人とも、十時頃に床についてねてしまったので別にかわった物音はきかなかったと答えた。最後に、安田が、少し興奮して起たった。彼は前夜十一時頃まで読書をしていたが、やはり変

わった物音は聞かなかったと答えた。下田夫婦も、安田の証言を
確認した。

現場げんじょう

の付近で拾得した証拠物は、例の凶器らしい棒杭一つ
で、それは、林家の垣に使用されていたものに相違ないこと、昨きのう
日まではちゃんと垣にたっていたことが異口同音に証言された。

ところで、被害者の家の搜索によつて、二階の紙屑くずかご籠から、

洋罫紙ようけいしにペンで認しめた四つに折つて封筒に入れたまま真ん中か

ら二つに裂いた未亡人から夫にあてた簡単な置き手紙が一通出た。
それは次のような文面だった。

私は出てゆきます。けれども、あなたへの抵抗を断念した
ではありません。できるだけ近い将来にきつと復讐して
みせます。

昭和二年一月八日

きよ

柴田久彌様

この事件については、これ以外のことは、その時も、その後も
何一つわからなかった。未亡人と林とは嫌疑者として嚴重な取り

調べを受けたけれども、前記以外にも大した手懸かりは得られなかった。未亡人の手紙はだいぶ嫌疑を深くする材料にはなつたし、彼女は、一時殺意を抱いたことは承認したけれども、犯行はきっぱり否認した。林も「あんな奴は自分で手を下しても殺してやりたいくらいに思った」ことは認めたけれども、凶行については何も知らぬと言い張った。下田夫婦や、林の細君や、安田も参考人としてたびたび取り調べを受けたけれども、ついに何らの手懸かりも得られなかった。

かくして、この事件は全く迷宮にはいつてしまい、警視庁でも、所轄署でも、匙^{さじ}を投げた形になってしまった。

五

ところが、それから一ヶ月もたった二月の上旬に、この事件の
関係者の一人である安田が、越前の郷里へ帰る途中、列車が大雪^な
崩^{だれ}のために転覆して、不慮の死を遂げてしまった。この出来事が、
ふと、私の頭に一つの想像を抱かせることになった。それは単な
る想像ではあるけれども、この事件に対して多少の光明を投げる
ものであると信ずるので、私は、この想像をもとにして一編の論
文を草して警視總監に送っておいた。しかし、警視庁で、私の意
見を採用したのかどうかさっぱりわからないし、ことによると、
ああいう種類の投書は、毎日警視總監宛^{あて}に何十通となく来るので、

私の投書も、ろくろく眼も通されずに屑籠くずかごの中へほうりこまれたのではないかとも思われる。それで私はいま、当時の新聞記事を材料にして、できるだけ正確にあの事件を小説体に記述し、最後に、私の論文の要旨をにかけて、広く一般の読者の批判を乞うことにしたのである。論文の題は「誰が何故彼を殺したか」というのである。以上の記述は単につけ足しに過ぎないのだ。

* * *

誰が何故彼を殺したのか
なにゆえ

新聞紙の報ずるところによると、田端の殺人事件はついに迷宮に入つたらしい。私は、最近に至つて、この事件が迷宮に入つたことは甚だ自然であり、今後どれほど捜査を進めていっても、この事件の犯人をあげる見込みは絶対になかろうと確信するに至つた。しかも私の推断は一般的性質を帯びたものであつて、ひとり今度の事件だけに關するものではないのである。私の論拠は、統計学あるいは確率論 *calculus of probability* に基づくのである。

第一に殺人その他の重罪犯人は犯行中精神の朦朧もうろう状態にあり、犯行後になつて、自分の犯行を全く記憶していない場合がある。かかる場合には動きのとれない物的証拠がない限り、犯人を検挙する手懸かりは全く無く、事件は迷宮に入るより外はない。

第二に、第一の場合と正反対に、犯行当時は、はっきりした意識をもっていたにかかわらず、犯行後になつて、とつぜん精神に異常を来して、記憶を喪失したり、あるいは全く発狂してしまう場合があり得る。この場合にも、証拠物件のない限り捜査の手段は全くなくなり、事件は迷宮に入るより外はない。

第三に、犯罪者が犯行後、良心の呵責かしやくその他の理由によりて、自殺をする場合がある。自殺の際には、全く遺書をのこさずに、ぜんぜん死因を知るに由よしないものもあり、遺書をのこす場合にも、元来遺書なるものには非常な修飾や誇張や隠蔽いんぺいが行われているのが通例であるから、不名誉な犯行のごときは告白せずに墓場までもつていく人があると見なければならぬ。この場合にも、一切

の捜査は徒勞になり、事件は迷宮に入らざるを得なくなる。

第四に犯行者が犯行後、それとは全く無関係な人に殺されることもないとは限らぬ。人を殺すような人間は、人から殺される危険も通常人より多くもつていふと考えるのが至当である。この場合にも犯人が既にこの世にいないのだから、いくら犯人をさがしても見つかる氣遣いはない。

最後に、犯人が、犯行後まもなく、病死、自然死、および不慮の死をとげる場合もあり得る。この場合にも結果は同様である。

以上のような出来事がないとしたならば、重大な犯罪事件が迷宮に入る氣遣いはないと私は信じる。それは、私が現今の警察力に信賴するからではなくて、人間の通有性——誰かに自分の犯行

を打ち明けたいという本能——を私は信ずるからである。この本能に我々は到底そんなに長く抵抗するわけにはゆかないのである。それほど、この本能は強いのである。

しかも重大犯罪のうちで迷宮に入^いった事件の比率を統計的に調べてみれば以上の五つの場合の起こる比率とほぼ一致するであろう。以上の論拠によりて私は一般に迷宮入事件は必ずしも警察の無能にのみよるものでない^と信ずるのである。

しからばこん度の田端事件はどうかというと、私が前に列举した最後の場合にあたるのではなからうか。私は犯人が、最近北陸線の列車で不慮の死をとげた安田であると仮定するのである。これは飽くまでも仮定である。けれどもこの仮定によりてすべての

辻^{つじ}棲^{つま}があつてくる。まず第一に下田の細君が死体を発見してバケツを落して異様な叫び声をあげた時に、すぐに彼が二階の雨戸をあけたことはいかに解釈すべきであるか？ 彼は夜更かしをして朝寝をする習慣をもっており、たいてい十時過ぎでなければ床^{とこ}をはなれなかったということである。かような朝寝の習慣者にとつては、午前六時頃はまさに眠^ね入り^いりばなのである。最も深く熟睡しているときである。林のごときは、下田の細君がどんだん戸を叩いてすら、容易に眼をさまさなかつたのに、安田が、下田の細君の叫び声にいち早く眼をさましたということは、彼が眠っていないかつたこと、そして誰かが死体を発見するのをびくびくして待っていたこと——少なくともそうらしいことを証明している。

彼はその前夜十一時に眠ったと証言している。そして下田夫婦はそれを確認している。しかるに下田夫婦は十時に眠ったと証言しているのである。十時に眠ったはずの下田夫婦が、安田が十一時に眠ったと証言したのである。この証言の無価値であることは一目瞭然^{りようぜん}である。下田夫婦は、十時以後安田が何をしたか、家の中^{うち}にいたかどうかとも全く知らぬはずである。

しかり、安田は十一時頃に階下^{した}へ降り、恐らく水を飲もうと思つて台所へ行つたに相違ない。ところが水^{みづ}瓶^{がめ}の水は氷つていたので、彼は井戸端へ水を汲^くみに行つたのであろう。その時、いったん、林を避けるために、今夜は帰らぬと言ひ残して家を出た柴田が、恐らくどつかで、したたか酒をあおつてひき返してきたの

だ。そして門の戸をあけようとしてまごまごしている所を、安田が、井戸のそばにある林の家の垣うちの棒杭をひきぬいて、うしろから、柴田の頭部をめがけて、力まかせに打ちのめしたのであろう。これは私の想像である。しかし多分に真実性をもった想像であると私は信ずる。

さてしからは、安田は何なに故ゆえに柴田を殺したのであるか。私は、彼らの仲間で出している、『我等の主張』という同どう人じん雑誌の中に、「ラスコリニコフのために」という感想文を彼が寄稿しているのを発見した。

「多数人の幸福のために一人の生命を奪うことは許さるべきであるか、これ、ドストエフスキーが、『罪と罰』の主人公を通して

我らに投げ与えた疑問である……」という冒頭で、彼はラスコリニコフの殺人を弁護し、彼の唯一の欠点は、非道なる金貸婆を殺したにとどまらずして、罪のないその妹をも事のついでに殺してしまった点だけであると論じ、さらに、今日の刑法に死刑が認められてあることは、彼の主張の正しいことを意味するものであると述べ、最後に、法律を以て罰する^{もつ}ことのできないような罪人、善良な人々を苦しめ、婦女子の貞操を蹂躪し、詐欺、賭博、泥棒をもって渡世とするような人間は法をまたずして制裁を加えるのが当然であると結んでいる。

右のうちに、筆者が圈点を付した部分は、柴田の性行に、あまりにもよく符号^{ふごう}しているではないか。安田は、柴田に対してずっ

と以前から殺意を抱いていたものに相違ない。林といい、柴田の未亡人といい、その他、柴田の性行をよく知る者はことごとく柴田の死をむしろ願ひ喜んでゐる。安田はそれらの人々の心中に潜在した願望を、自ら犠牲となつて実行したのである。彼が、犯行の現場げんじょうに集まつた群集に対して、警官の到着前に、興奮して演説しようとしたのは、このことを裏書きしている。あの時もし警官の到着が五分もおくれたら、彼は、あの場で自分の犯行を自白してしまつたであらうと私は信ずる。

安田はラスコリニコフよりも強かつた。しかも、彼は邪惡漢柴田を裁断しただけで、外の人には何の迷惑をもかけていない。それどころか、近所の人々はみな柴田の変死を喜んでゐる形勢が

ある。安田の心中はきつと満足であつたろうと私は忖度^{そんたく}する。

けれども今回彼がとつぜん郷里へ帰ろうとしたのは、恐らく、自分の犯行を父母に告げて、その後男らしく自首して出る決心であつたのかもわからぬ。いかに意志の強い人間でも、自己の心中の秘密と戦つてゆくことは非常に困難であつただろうから、しかもそう解釈すれば、彼がとつぜん七年振りに、時もあるうに雪で埋まつている郷里へ帰ろうと決心したわけも説明がつく。

以上のごとき推理に基づいて、私は田端事件の犯人は既にこの世にいないことを主張し、したがって当局者が、この上、この事件の捜査に貴重な時間と労力とを費やすは無益であることを信じて、捜査の打ち切りを切に当局に勧告するものである。

青空文庫情報

底本：「平林初之輔探偵小説選1」[#「1」はローマ数字、1-13-2
1]「論創ミステリ叢書1」論創社

2003（平成15）年10月10日初版第1刷発行

初出：「新青年 八卷五号」

1927（昭和2）年4月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2010年7月4日作成

2011年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

誰が何故彼を殺したか

平林初之輔

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>